

②C—29 さげ手に関する人間工学的研究

奈良女子大 砂田 孝子
渡辺みよ子
北村 君

1. 日常生活、家庭生活において人間が行なう作業の大部分は上肢の運動を中心とする。これら作業のうちで「さげる」はよくみられる動作であり、重いものでも比較的持ちやすい持ち方と思われる。ゆえにその「さげやすさ」についての条件を人間工学的に研究することは非常に有効であると考えられる。そこで我々は物をさげる場合のさげやすい状態及びさげやすいさげ手について実験を行ない、いくらかの知見を得たので報告する。

2. さげやすい条件は力のでやすい条件にほぼ一致すると考えられる。そこで各種条件における「ひっぱり」の最大力をストレイン・ゲージを使用した力量計及びP L型抵抗線測定器を用いて電氣的に測定した。但し、さげ手については、石膏で作った円形のもの ($\phi 22, 26, 32, 38.5 \text{ mm}$) 及びその他を用いた。

3. (1) 手くびを自然にさげた時の「ひっぱり力」とさげ手が床面に対して平行である時のそれとでは、その

最大力にあまり差がない。

(2) 片手のみでさげ手をひっぱるよりも、両手にそれぞれ力をいれて同時にひっぱる方がひっぱり力は大となる。

(3) 標準的大きさの手掌において、力のでやすいさげ手の太さは、円形のもので直径 26 mm~32.5 mm である。